

心のひだを感じようとする心

H P の「佐世保の小学校の事件に接して（バックナンバ - マスコミ等コメント関係 P2004/06/05/：参照）」を目にしたメル友から、早速次のようなコメントをいただいた。

私自身もこの数年間、講義においてまったく同じことを言ってきました。私の言い方は「メ - ルでコミュニケーションができると思ったらとんでもない間違いですよ」と言っています。

コミュニケーションと情報伝達手段とを、全く同じ言葉として使用している人が多いのにはウンザリします。テレビなどでメ - ルなどをコミュニケーションなどと言っているのを見ると、腹立ちさえ感じます。

ですから、私はこの言葉自体を全く別な用語として使うということを提案したいのです。

コミュニケーションということばがあまりにも多義的で、安易に使われるものですから、本当に大事なことが何なのか、曖昧になってしまうのだと思います。

コミュニケーションがとれてるとかとれてないとかそんな話ではなく、人と人との係わり合いで本当に大切にしなければならないことは、どういうことなのかということでしょう。それは、単なる情報の交換ではなく、何故その人がそういった発信をしてきたのかを思んばかりながら、その人の心のひだを感じながら、発信を返し、相互の循環的なやりとりが展開していくことをいうのではないかと思っています。

私なりにコミュニケーションの本質を更に例示すれば、赤ちゃんは話し言葉を持っていないが、母親とはコミュニケーション可能である。母親は赤ちゃんの泣き声、しぐさから、赤ちゃんの心を読み取ろうとし、そのやりとりの中から更にコミュニケーションを深め、よりスムーズにコミュニケーションを可能にするために、次第に言葉を手段として使うようになる。

また、拉致家族のお子さんたちは日本語でのコミュニケーションにはまだ不自由してるようだが、祖父は「言葉での会話はまだ無理だが、気持ちが通じ合えてきて、嬉しい。」とTV番組で述べていた。

つまり、相手の気持ちを「思んばかりながら、その人の心のひだを感じよう」とし、「相互の（平面的な循環的というより向上性のある）螺旋的なやりとり」という心の交流こそが、コミュニケーションの本質であろうと思う。

（2004年06月12日記）